

夜明け前の暗黒色な

Clouds and darkness are round about him, and he is alone in the world, and he trembles.
A fire goeth before him, and burneth up his enemies round about.
The hills melted like wax at the presence of the Lord, when he is angry.

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック
2009年秋号

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

9月18日には『夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-』の通常版を発売致しました。

初回版では、MC+PS2版（Brighter than dawning blue）のプレミアム版と、MCのみのスタンダード版をご用意しましたが、通常版では「MCのみ」「PS2版のみ」を別々に販売しております。

もし未プレイの方がいらっしゃいましたら、お手に取っていただければ幸いです。

また、マリン・エンタテインメント様のサイトでFAのウェブラジオ「修智館学院出張生徒会」が始まりました。もうお聴き頂いたでしょうか？ウェブラジオは声優さんの個性と、元キャラのバランスをどの辺で取るかが難しいところです。試行錯誤しておりますので、もしよろしければご意見ご感想を頂ければと思います。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2009年秋 オーガスト/ARIA 拝

CONTENTS

3 …… 『FORTUNE ARTERIAL』マンガ
似てる？似てない？

7 …… 『夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-』シールドストーリー
真夜中の来訪者

10 …… スタッフ対談

11 …… あとがき





似てる？似てない？ byべっかんこう







お姉ちゃん来てないかな



孝平くん、こんばんは



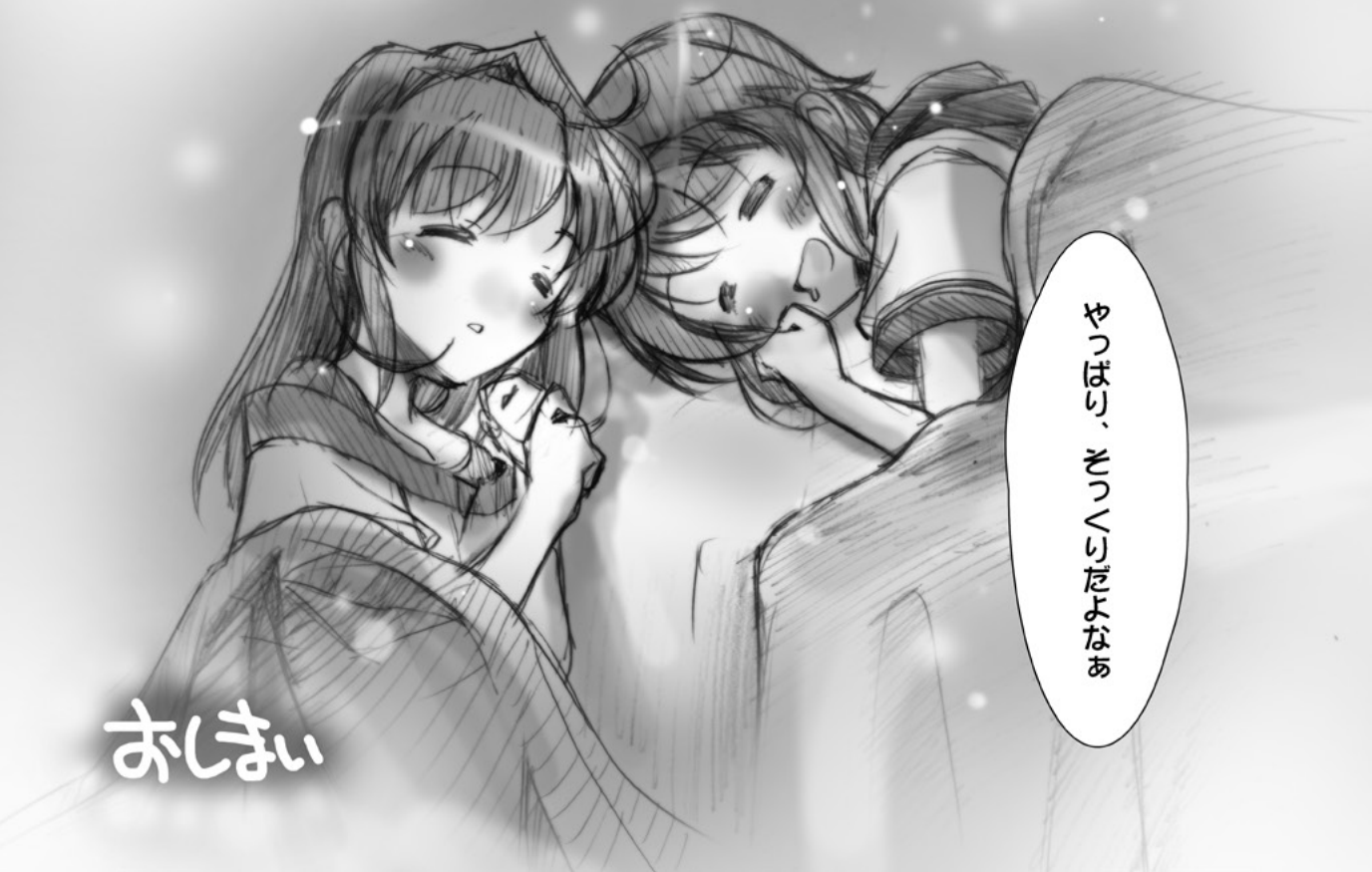
じゃあちょっとだけ



仕方ないなあ。ごめんね、孝平くん

起きないまま待つって...?





おしまい

さっしゅん、きゅんきゅんぽよぽよ

夜明け前より瑠璃色な

真夜中の来訪者

安西秀明

夜明け前より瑠璃色なショートストーリー

また、同じ少女の夢だ。
彼女が動く度に、頭の後ろで一本に束ねた金色の髪が揺れる。

地球の雨に、嬉しそうに濡れる姿。
波に足を取られ、俺にしがみつく感触。
それから、最後に見た涙を堪えた笑顔。
俺は彼女の名前を呼ぶ。

——シンシア。
「私の本音を知って、特別な人になったかったんですよ？」
——ああ。

「世界中で、私が本音言ったのはタツヤだけよ」
——最後まで、恋人として恥ずかしくないようにしよう。
「シンシア・マルグリット。これからターミナルに戻ります」

——だから俺たちは泣かないと決めたんだ。
シンシアの華奢な背中がゆっくりと遠ざかる。
消えていく。

シンシアが、消えていく。
たったの七日間。
何よりも大切な時間。
彼女がくれた幸せな思い出は、彼女がいなくなった今でも色褪せることはない。
彼女は、永遠の別れではないと言った。
人類が彼女のいるターミナルに辿り着くまでのお別れだ。

だから、俺は手を伸ばす。
消えていった彼女の後ろ姿に向かって。

「私がターミナルに戻ったら、タツヤはタツヤの幸せをつかんで」
シンシアはこの手を望んでいるのだろうか。
心に迷いが生まれる。

彼女の本心を知る術は、もうない。

こつり。

小さな音がした。
目を開けると、見慣れた天井が目に入る。

こつり。

もう一度、音がする。
どうやら、窓から聞こえるようだ。
何の音だろうか？

布団から出て、肌寒さに少し身震いをする。

目覚めたばかりではつきりとしなない頭を振った。
菜月が窓を叩いているのだろうか？
そう思っただけでカーテンを開ける。

そこには——
誰もいない。

こん、こん。

目の前で、窓が震える。

普通なら驚くところだろうが、俺は懐かしさを覚えずに思わず微笑んだ。
鍵を外し、窓を開く。

部屋に、見えない誰かが入ってくる気配を感じる。
「お久しぶりですね、フィアッカさん」

虚空に向かって、声をかけた。

独特の機械音と共に、小柄な少女が現れる。

エメラルドではなく紅い瞳。
リースと体を共有する人物だ。

「こんな夜更けに、すまない」
「構いませんよ。エステルさんが寝てから、抜け出したんでしょ」

「……まあ、そんなところだ」
フィアッカさんは曖昧に頷くと、じっと俺を見つめた。

俺の心を見透かすような目で。
部屋を静寂が支配する。

「あの時以来、ですよ」
シンシアが去ってから、フィアッカさんに会うのはこれが初めてだ。

「もう会うことはない、と言ったのにな」
「なにか緊急の用件ですか？」

「そういうわけではないんだ。ただ……」
フィアッカさんは、どう切り出したらいいか迷っているようだ。

何だろうか？
暫くして、フィアッカさんの唇が開かれる。

「最近どうだ？」
世間話をしに来たのか……？

「ボチボチです」

「……もう少し、詳しく教えてくれ」
「最近、特に変わったことはありません。進学するために勉強に追われているくらいです」

「それは大変だな」
あまり興味の無さそうな相づちだった。

「別に変なところではないです。こんなところで躓いたら、シンシアに会わせる顔がありませんし」
「……進学とシアが関係しているのか？」

フィアッカさんが、探るように俺の目を見た。
「俺は、科学者になることにしたんです」
「……シアの言葉を、真に受けたのか」

夜明け前の増城色な

——空間跳躍技術を完成したら、また会える。

「そうです」

「だが、あれは——」

「わかっていきます。シンシアは、本気で言ったわけじゃないでしょう。空間跳躍技術だって、俺が死ぬまでに完成しないかもしれません」

「その通りだ。完成しない技術に、一生を捧げる気か？」

「はい」

迷わずにうなずく。

それはもう、決めたことだ。

「シアが、お前に忘れて欲しいと願っていたとしてもか」

「はい」

「身勝手だな」

辛辣な言葉が返ってくる。

フィアッカさんの言う通りかも知れない。

シンシアは、俺の行動を知ったらどう思うだろう？

馬鹿だと思っのか。

嬉しいと思ってくれるのか。

それとも悲しむのか。

わからない。

それでも、一つだけわかっていることがある。

「俺は、死ぬまでシンシアのことは忘れないでしょう」

フィアッカさんは無表情だ。

「忘れようとしても、忘れられないんです。あれからずっとシンシアの夢を見るんですよ」

夢の中とはいえ、彼女に会えるのは嬉しいことだった。

懐かしさに、思わず顔がほころんでしまっくらいに。

今もシンシアは、俺の心を掴んで離さない。

「俺が科学者になることなんて、彼女は望んでないかも知れません。フィアッカさんの言うように、

忘れて欲しいと思っているのかも」

シンシアがいなくなっからずっと考えていたこと

を、噛み締めるように口にする。

「それでも、俺は少しでも早くシンシアが使命から救われるように、生きていたいんです」

「……その気持ちには、時間が経てば変わるのではないか？」

「変わりませんよ」

「どうして言い切れる？」

「自分の気持ちは、自分でわかります。こう見えても一度決めたら突っ走るタイプなんですよ」

「知っている」

フィアッカさんは、呆れたように言った。

納得したかのように、俺に小さくうなずく。

「そこまで決めているのなら、何も言うまい」

俺に向かって微笑む。

意味がよくわからなかった。

「シアと別れた時のことを覚えているか？」

「もちろんです」

「あの時、シアに山百合を渡しただろう」

「はい」

「達哉が山百合を取りに行ったあの時、私はシンシアにある事を頼まれたんだ」

「え？」

——もしもしばらくして、

達哉が私のことを忘れていなくて、

まだずっと想っていてくれていて、

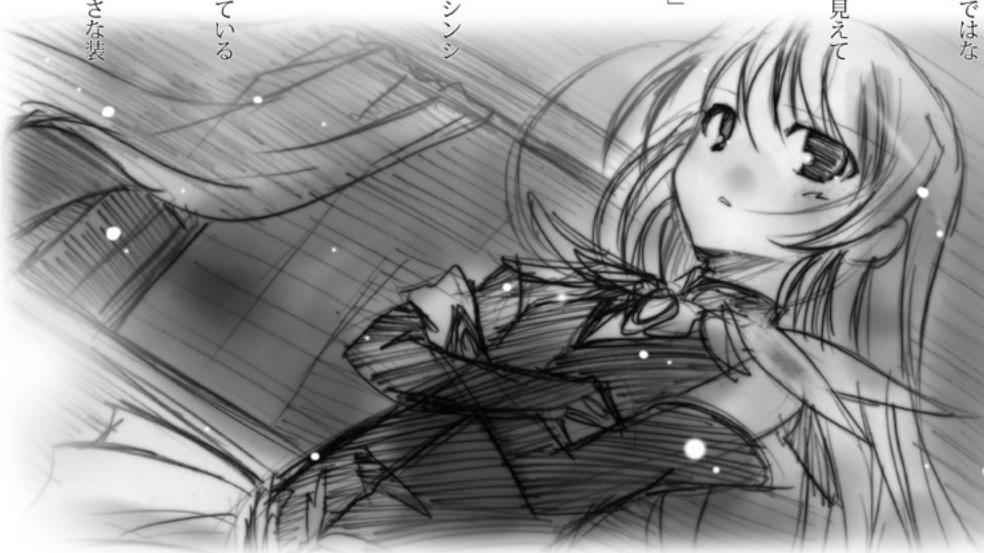
まったく諦めていないようなバカな真似をしているのなら、

これを、渡して——

フィアッカさんの小さな手から、俺の手に小さな装飾品が渡される。

「それはシアが身につけていた物だ」

「シンシアの……」



夜明け前の留城色な

Copyright © 2013, All Rights Reserved. This work is a trademark of the publisher. All rights reserved. No part of this work may be reproduced without the publisher's permission.

「あいつは何も持っていないなかったからな。これが精一杯だったんだろう」

俺が山百合を必死に探したように、シンシアはこれをファイアツカさんに預けたのか。

胸に熱いものが、じんわりと込みあげてくる。

「シアはお前が考えたのと同じように、別れの品を渡そうと考えた。しかし、もしも達哉がシアのことを忘れることができるのなら、別れの品など無いほうがいい」

「俺が思い出してしまうから、ですか」

「そういうことだ。だから、達哉の気持ちを確認する必要があった。お前がシンシアの言うところのバカな真似をしていなければ、渡さなかった」

「そう、ですか……」

小さな蒼色の装飾品を見つめる。

シンシアが、俺に忘れて欲しいと思っていたのは本当だろう。

それは、彼女が理性的に俺のことを考えてくれたこと。

「……よかった」

思わず、言葉にしていた。

「何がだ」

「……許されたような気がするんです」

「許す？」

「だって、シンシアは俺が想い続けた場合のことを想定していたんでしょう？」

「ああ」

「心の底から忘れて欲しいと思っているのなら、こんなことはほしくないと思いますから」

「ずいぶん前向きだな」

「ファイアツカさんが、もしシンシアの立場だったら、どう思いますか？」

「私はシアではない。私の意見は何の参考にもならんよ。ただ……」

「なんですか？」

「姉として、シアの恋人がお前でよかったと思っ
ている」

「最高の賛辞ですね」

「ああ。誇っていい」

冗談っぽく言うけど、ゆっくりと窓に向かう。

今度こそ、ファイアツカさんに会うのはこれで最後になるのかもしれない。

「ああ、そうだ……シアの言っていた『しばらくしたら』という期間についてだが」

ファイアツカさんは、振り返らずに言う。

「シアならば、今日を選ぶのではないかと思ったんだ」

「どうして、ですか？」

俺は小柄な背中に向かって訊ねた。

「恋人の誕生日に、プレゼントくらい渡したいだろうと思っ
てな」

最後に、そう言い残して――

機械音と共に、ファイアツカさんの姿が消える。

時計は十二時を回っていた。

そうか、俺の誕生日になったのか。

ファイアツカさんがわざわざこの時間に来たのはそのためだったのだ。

「……ありがとうございます」

手の中に残った、シンシアからのプレゼントを見つめる。

どれだけ月日が流れても。

例え俺の体が朽ち果ててしまったとしても。

いつか必ず、シンシアのもとに辿り着いてみせる。

そう、心に決めたのだった。

END



べっかんろう(以下べ):さあ対談の時間がやってきました。

榊原拓(以下榊):夏から秋、そして冬はあつという間ですね。

べ:ほやほやしてるとすぐ冬コミですよ。

榊:FAのラジオは聞いて頂いてるでしょうか。

べ:あの2人がパーソナリティということで、どうなるんだろうと
思いましたが、なかなか名コンビですね。

榊:やはりボケとツッコミなのがいじりでしょうか。

べ:さすが兄妹。息がぴったりです。今後のゲストも楽しみです。

榊:MCのアンケート葉書では、Webラジオは聞いている方と聞いてない
方ははっきり分かれました。聞いている方は沢山聞いてると。

べ:僕もちょこちょこ聞いている方かな? あとは、今度「夜明け前よ
り瑠璃色な」がPSPで出ることになりましたね。

榊:そういえば、携帯機向けって初めてかも。

べ:これで、いつでもどこでもヒロイン達と会えますよ!

榊:えーさてさて唐突ですが、MobileARIAという携帯向けのサ
イトがあるのはご存知かと思いますが、そこにこっそり「ご意
見箱」を設置してあるのはお気づきでしょうか。

べ:こっそりなんですか(笑)

榊:基本的に「お返事はできないか」というご意見箱な
ので大々的に宣伝するのどうかなと。

べ:でもちゃんとチェックしてますよー。

榊:で、今日はどんなご意見が多いか発表~という企画で。

べ:なるほど。

榊:まず一番多いのは、サイトの誤字脱字等の指摘です。

べ:ありがとうございます。なるべく早く対応していきたいです。

榊:担当のよもぎ君は頑張ってますよ。あとは、イベント
の感想もたくさん頂きました。

べ:イベントグッズの通販希望とか、天罰祭の感想とか。

榊:天罰祭は概ねご好評を頂いたようで何よりです。イベントを実
施する前はどうかとときどきしてたんですが。

べ:初めての試みでしたからねー。

榊:しかも並んでいただいたお客様を叩くという。

べ:ねえ(笑)でも叩かれた後の皆さんの笑顔が印象的でした。ちな
みに僕も叩いてもらいましたよ。ちょっと嬉しかったです。

榊:いいなあ。手は上げたんですか?

べ:上げましたよー。しかもタブルで叩いてもらいました。

榊:うらやましいな!

べ:これから、楽しんで頂けるイベントを考えていきましょう。

榊:例え、件数はそれなりですが、長文が多いのがゲームのご感想
です。アンケート葉書はフリー記入欄が小さいからでしょうか。

べ:書ききれない時はこちらに感想を書いていただくのもありが
ちかもしれませんね。

榊:あとは移植や、ファンBOX2発売といったご要望も。このあたり
は気長に、あまり期待せずにお待ち頂ければと……。

べ:そうですね。とりあえず今は新作を鋭意制作中です。

榊:こちらのチームはプロットがほぼ固まりました。

べ:こつちもキャラの色がとんとん決まっていますよー。

榊:えー、ご意見箱につきましては、気軽にご意見ご感想その他を
頂ければと思います。

べ:もしかしたら貴方のご意見がゲームに反映されるかも!

榊:いや、あまり過剰に期待は煽らなくてください(笑)

2009.9.21 22:15 社内にて

スナップ対談 第24回 べっかんろう & 榊原拓



POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

さて開発室で進めている次回作の制作ですが、いつ情報が出るのかと気を揉まれている方もいらっしゃるかと思います。大変お待ちしておりますが、やっと、冬には皆様に第一報をお届けできそうな状況になってきました。もちろん100%というわけにはいかないものの、自分達にプレッシャーをかける意味でも、ここでは「冬にご期待下さい」と書いておこうと思います。

ウェブラジオが始まった『FORTUNE ARTERIAL』も、この先の展開が徐々に形になってきつつあります。こちらはまだ具体的にお話できる段階ではありませんが、何やら生徒会会長の某氏がまた変なことを考えているようで……？

また、既にご存知の方もいらっしゃる通り『夜明け前より瑠璃色な』のPSP版を発売することになりました。内容はPS2版／「Brighter than dawning blue for PC」と同様なので、既にお持ちの方が新たにお買い上げ頂く必要はありません。「どうしても外出先でプレイしたい!」という方や、家に自由に使えるPCやPS2が無くてこれまでプレイできなかったという方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくお願い致します。

それでは、今回はこの辺で。
今後とも、オーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2009年秋 オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック
2009年秋号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>
<http://aria-soft.com/>



PIZZA★



FORTUNE ARTERIAL

フォーチュンアテリアル

夜明け前より瑠璃色な

Moonlight Cradle



夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness descend about
A fire goeth before him, and burneth up his
The hills melted like wax at the presence of
The Lord, and the mountains of the whole earth.

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック
2009年秋号

